

## 日航機惨事で知った人の愛 『娘の遺してくれたもの』

田中 蔚<sup>しげる</sup>

1985年（昭和60年）8月12日、娘が日航機墜落事故で遭難した。娘は中学校で体育の教師をしていた。御巢鷹山の山奥で、傷があれば自分で止血し、夜露を飲んででも、必ず生きているにちがいない。そう信じて現地に馳せつけた。事故は凄惨を極め想像を絶していた。バラバラ遺体の中を気が狂ったように捜し求めてわが子にやっと巡り会えたのは7日目であった。

「どんなに変わり果てた姿であろうと、せめて一晩わが家の畳の上に寝かせてから葬ってやりたい」という妻を説いて、遠い高崎の地で茶毘にふした。来春の結婚に夢見たであろうウェディングドレスを着せ、好きだったテニスのボールを左手に握らせて・・・。

一条の煙と共に、白骨と化したその遺体を抱きしめた時、とめどなく流れる涙と共に「よう帰ってきたのう」と思わず微笑んだ私。

その時、一緒に同道した婚約者の姿がいじらしかった。彼はこの事故の一ヶ月ほど前に「愛子さんとの結婚を認めてください」とわが家を訪れた。「うちは同和地区ですよ」と言うと、「愛子さんから聞いています。両親が、お盆にお願いにくるはずですよ」これが彼と交わした最初の会話であった。

そして、奇しくも遺体収容の藤岡市の体育館で両家の親が対面した。私が同和問題に触れたとき、彼のお父さんは「私は教師です。少なくとも人様に平等を説く人間として、自分を偽るようなことはようしません」と言われた。私は返す言葉もなかった。

娘の縁談を聞いたとき「それでも親戚の中には反対の人がいるかもしれない」娘が先々思い悩むのでは」と、あれやこれや思い過ごしていた自分が恥ずかしかった。こんなお父さんや彼だからこそ、「私部落の生まれなんよ」と重い言葉をうち明けることができたのだろう。「これからも息子を、お宅の家族の一員に加えてお付き合いさせてさしてください」とお父さんはおっしゃった。

お盆休みの休暇が切れ、いくら勧めても彼は職場に帰ろうとしなかった。疲れ果てた妻の肩をもみ、私に濡れたタオルを絞り、買い物や電話の対応や、遺体の確認に奔走してくれた。

四十九日がすんでから、彼は畳半分もある大きな娘の肖像画を持ってきた。娘の面影がそこには鮮やかに描かれていた。「仕事の合間に毎晩絵筆をとる間だけが心休まる時なんです。愛子さんに会いたくなれば、この絵を見にきます」と四十九日の一つの区切りに思いを断ち切らせたいと願った私だったのだが。

11月の連休には、彼が泊まりがけでやってきた。生まれて初めての、稲刈りや脱穀を手伝ってくれた。「これで、来年田植えをすれば僕もひとかどのお百姓さんになれるすかね」とも言った。あれから数ヶ月、やがてその田植えの時期がやってくる。

遺体が見つかるまでの一週間、娘が神戸を発つときの服装や持ち物、歯型などの情報を持って、数人の友達が阪神や和歌山から駆けつけてくれた。いずれも大学時代やその後のスポーツ仲間だった。葬式がすんでからも四国や岡山から友達が訪ねてきた。友情とは何なのか。愛とはいったい何なのか。ひとかどに愛の道を人に説いてきた私に果たしてそれができるのか。愛とは人に説くことではなく行うことなのだ。それを私は教えられた。

人の命には限りがある  
だから自分の思うように生きたい  
人は軽く、十年先、二十年先を口にするけど  
そのときを大切にしなければ  
今、光っていたい

娘の絶筆である。「今、光っていたい」の思いを遺して娘は還らぬ人となってしまった。朝夕仏壇に合掌するたびに、唱えるべきお経を知らない私は、この詩を口ずさむ。いつの間にかフシのつくようになった詩を口ずさみながら、私は水戸社宣言のさいごにある「人の世に熱あれ、人間に光りあれ」の西光万吉の言葉とが、重なり合って今日も静かに手を合わせる。

人を愛し愛される人に 育てよと 名づけし、「愛子」空に散り逝く  
（『感性に訴える同和教育』から）

### 今、光っていたい

- 1 時間は・・・  
悲しみや苦しみをやわらげて  
涙をため息にかえてくれる  
そう信じます  
人の心は翼をもっていて・・・  
人の命には限りがある  
だからこそ自分の思うように生きたい  
人は軽く、十年先、二十年先を口にするけど  
その時を大切にしなければ・・・  
今、光っていたい



- 2 「一日一生涯」とお前は言った  
その時、その一日を精一杯生きていたいと  
被差別部落に生まれて  
人に後ろ指さされるような  
恥ずかしい生き方はしたくないと  
人としての誇りに生き抜きたい  
私は今、光っていたい

- 3 今、光っていたい、そんな思いを残して  
娘は26才の生涯を閉じた  
娘よ、お前はそんなに光っていたかったのか  
娘よ、お前から光を決して消しはしない  
暗闇の仏間に今日も灯りをつける  
お前の小さな灯りが  
やがて燎原の炎となって  
この世から差別がなくなるその日まで  
娘よ燃え広がれ 娘よ光るがいい



- 4 心は翼をもっていて  
娘は私に語り続けてくれる  
「お父さん 悲しみや苦しみを乗り越えて  
今、光っていたい 私の思い 人に伝えてね  
みんなに伝えてね お父さん  
年老いたなんて言わないで お父さん」

